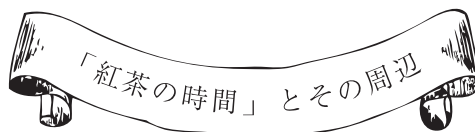


きもちは、 言葉を さがしている



第 36 話

水野 スウ

1冊の生徒手帳

2019年の1月、ある日の紅茶のしまい際、スウさんに見せたいものがあるんです、と言って、30代はじめの若者が、手のひらにすっぽり収まるほどミニサイズの、黒い表紙の手帳をとりだしました。

それはどうやら、彼が卒業した中学校の生徒手帳。開いて見せてくれたページには「生徒憲章」が書かれているらしく。らしく、というのは、そこにちっちゃな文字が点々と並んでいたけれど、そのままの大きさだと私の目ではとても読み取れなかったから。だけどきっとここに何か大事なことが書いてあるに違いない、ってことだけ直感した私は、同じ町内に住む彼を家まで送ることにして、途中のコンビニで手帳の2ページを拡大コピーさせてもらいました。

そうしてやっと読めたページには、わお！ こんなすごいことが書いてある。

《生徒憲章》 1996年3月15日制定

【人権の章】

人間だから
わたしの生命^{いのち}も心もたった一つ
かけがえのないひとりとして
大切にされる
あなたも人間だから
わたしはあなたを大切にする

【自主の章】

人間だから
わたしはわたしの意志をもつ
自ら創りあげる喜び
やりとげる責任とともに
ひとりの人間だから
わたしもあなたも自分で立てる

【民主の章】

人間だから
わたしはあなたと違う
たがいを認め、そして話しあう
違う人間だけれど平等であるために
だれもが人間だから
わたしとあなたは支えあえる

【希望の章】

人間だから
わたしはわたしを高めていける
真実を求め
豊かな心を育てる
わたしたちは人間だから
夢に向かってともに歩く

それは、北海道十勝の士幌町、士幌中央中学校の生徒憲章でした。読み終わるなり、素晴らしいね！と声をあげると、これ、先生から充てがわれたんじゃないくて、中学の先輩たちが自分たちでつくったんですよ、と、彼。3年先輩の当時の生徒会の生徒たちが、顧問である社会科の先生の助けも借りながら自分たちで作成したものだそうです。

人権の章は、私の一番好きな、個人の尊重を謳った憲法13条——あなたはほかの誰ともとりかえがきかない。あなたもわたしも大切な存在で、その大切さは行ったり来たり——と、ぴったり重なっています。民主の章には、その13条もはいつてるし、両性の平等と個人の尊厳の、14条もはいつている。自主の章には、私たち一人一人が自分の意志を持つ、と書いてある。見開きのページのどの章にも、「個」＋「ともに」が満ちていました。

同じ町で

この生徒憲章を見せてくれた若者の名前は、菊地まさあき将晃くん。彼との出逢いは、この日からさかのぼることほぼ1年前、2018年の冬でした。同じ町内にある、障がいを持つ人たちのはたらくコミュニティカフェで、彼は店長さんをしていましたのです。そのカフェに『ほめ言葉のシャワー』を置かせてもらえることになり、その件ではじめて彼と言葉をかわした

時のこと。開口一番、「実はぼく、この本、山形の友だちからもらって持ってるんです！」と、まっすぐな目でうれしそうに菊地くんは話しはじめました。

山形の大学を卒業した後、障がいのある人や高齢者介護の施設で働き、沖縄に移って障がいのある子どもたちの施設で働いていた彼のもとに、旅行で金沢21世紀美術館を訪れた山形時代の友人が『ほめ言葉のシャワー』を見つけて送ってくれたのだそうです。その後、縁あって石川県津幡町のコミュニティカフェで働くことになり、まさかこの本をつくった人が同じ町に住んでいると知ってびっくり、という話に、こっちこそびっくり！

私は自己紹介がわりに、毎週、家で「紅茶の時間」という場をひらいていること、そこでさまざまな人と出逢ってきたこと、たくさんの人が、目に見える数字や結果だけで評価されて、一人ひとりの、ただ在る、ことがとてもないがしろにされてるのが悲しい、といったことなど話しました。

「そうですね、壺の中にあって、外からは見えなけれど、たしかに在る。でも今の社会では壺からはみでた部分しか、認められないんですよ」とすぐに返ってきた菊地くんの言葉に、あ、彼もまた、一人ひとりの、在る・居る、という存在のBeに、私と似た価値感覚をもっている人なのかもしれない、と感じたことが、ずっと心に残っていました。

ぼくがここに

それから半年あまりたったころ、菊地くんの職場だったコミュニティカフェがある事情で突然閉じることになり、店長さんをしていた彼も職を失うことに。でもそのおかげというか、それまでほとんど立ち寄る間のなかった紅茶の時間に、彼はたびたびやって来るようになりました。私もあの冬の日以来、彼とかわした会話の続きができるようになったのです。

はやらない紅茶の時間で、ある日、彼から印象深い話を聴きました。山形の大学に通っている半ばで、彼には心が苦しい時期があったそうです。大学に行ける日もあれば、こもって死にたい気持ちになる日もあり、時には夜、誰もいないところで一人、自分

へのいらだちをぶつけるようにストリートダンスをすることもあり。そんなふうに時間が過ぎていく中で、いつまでも閉じこもってちゃだめだ、という思いと知人の紹介もあって、ふと思い立って障がいを持つ人たちのいる施設にボランティアをしにいった時のこと。

彼がはじめて足を踏み入れたその瞬間、向こうから勢いよく、うれしそうな表情でやってきた、おそらくダウン症らしき男性がいきなり、彼をギュッ！とハグ。え！ええ？ この人きっと自分を職員の誰かと勘違いしてる、とびっくりすると同時に、その時とても不思議なきもちがしたと彼は言いました。その人にギュッとされた腕の中で、ぼくの存在がその時たしかにそこに在る、ぼくが今ここにいる、自分はここにいていいんだ、そんな感じがした、というのです。

菊地くんのこの話を聴いてすぐに思い浮かんだのが、まど・みちおさんの詩でした。

「ぼくがここに」

ぼくが　ここに　いるとき
ほかの　どんなものも
ぼくに　かさなって
ここに　いることは　できない

もしも　ゾウが　ここに　いるならば
そのゾウだけ
マメが　いるならば
その一つぶの　マメだけ
しか　ここに　いることは　できない

ああ　このちきゅうの　うえでは
こんなに　だいじに
まもられているのだ
どんなものが　どんなところに
いるときにも

その「いること」こそが
なににも　まして
すばらしいこと　として

うん、まさに、これです！と、彼もこの詩に感じるものがいっぱいあったようでした。そうなんだねえ、なんだかわかる気がするよ。ひきこもっている時って、自分自身のいま生きている感、はとっても希薄で、からだ自体がそこにあるのかないのか定かでなくて、心もとないような、頼りないような。だけど誰かに思いきりギュッ！ってされた時、腕に囲まれた小さな空間の中で、自分の存在が、からだが、たしかに今ここに在ると実感できる、ってこと、きっとあるんだよね、そう思ったのです。

紅茶では、彼のダンス姿も何度か見ることができました。FB動画でダンスする彼をたまたま見つけて、うわ！彼、すごいダンスするひとなんだ、と知ってから、紅茶でも何度か無茶なリクエストしては彼にダンスパフォーマンスをしてもらったのです。身体中の細胞がはずんでよろこんでるような、菊地くんのダンスは、ほんとうにかっこいい、楽しい。しぜんにこっちのからだもワクワクしてくるダンス。

彼は、山形の学生時代に始めたダンスを、障がいのある人たちとも一緒にいっぱい楽しんできたといいます。沖縄にいたときも、石川に越してからも、彼らとダンスをするために、月に一度は山形に帰っているんです、とはじめて聞いた時は、え、山形まで？と驚きました。

でも、彼の目指すダンスの持つ意味と想いが、彼のダンスを見るたび少しずつ私に近づいてきました。こころとからだがはずむダンス、うまいへたを競わない、障がいのあるなしも関係ない、その人その人の持ち味そのまま、きもちがひらいて動きだすダンス、人と人がつながっていくダンス。彼のダンスにはそんなちからがあるように感じられたのです。

あの若者はいったいだれ？

菊地くんがこの連載に登場するのは、実は2回目。第34話で、平和のために行動するアメリカの元軍人たちの会「ベテランズ・フォー・ピース」のメンバーたちが石川に来て、「僕たちが見た、戦場のリアル」というテーマで講演してくれたことを書きましたが、その中に登場するKくんが菊地くんなのです。(その時のことはマガジン35号「きもちは、言葉を

さがしている・第34話」に→<https://www.humanservices.jp/wp-content/uploads/magazine/vol35/16.pdf>)

ベトナム戦争とイラク戦争に従軍した二人の元軍人さん。彼らは、話を始める前に私たちに向かって、原爆の投下や空襲で大きな被害を日本にもたらしたこと、今も沖縄に対してアメリカがしていることについて深く謝罪しました。すると、講演が終わって質問の時間にうつった時、参加していた菊地くんが立ちあがってこう言ったのです。

「今日の講演会が、まず謝罪から始まったことにびっくりしました。日本も、アメリカに対して、謝るべきだと思う、そうじゃないとフェアじゃないと思うんで。だから、ぼくらは、すいませんでした！」

帽子をとって深々とお辞儀をした若者に、その場は一瞬しーんとなりました。続けて彼は、

「ぼくには何が本当なのかわからない。でもあなたたちが発信していることは、真実と思って帰っていいでしょうか。今日、この場に参加できて本当によかったです」

彼が話し終わると、会場からあたたかい拍手がわきおこりました。海を越え、世代を越え、平和を願うもの同士のきもちが謝罪しあい、呼応しあった、そんな瞬間でした。

ベテランズの講演会を主催したのは、金沢でピースアクションやピースウォークをよくともにする仲間たち。会の終わりに一人の若者が立って謝罪したあの1場面は、ピース仲間たちに強烈なインパクトを残し、その後しばし仲間内で、あの若者いったい誰？という声が行き交いました。

それから数日後の紅茶の時間に訪れた菊地くん、あの日、彼がああ場で謝罪したきもちについてあらためて尋ねてみました。

「自分が謝った時、ああ場があまりにしーんってなったので、あれ、何かまずいこと言っちゃったかと心配になったけど、だいじょうぶだったんですね。ぼくは、彼らと友だちになりたいと思った、国対国じゃなくて、対個人として。でもそのためには、たいていフェアじゃない、って感じて、あんなふうに謝ったんだと思います」

その日の夜、あの日、きもちを、あらためてもう

一度言葉にした彼のFacebookの投稿は瞬く間にシェアされて、彼の存在は紅茶以外のピース仲間たちにもしっかりと認知されていったのです（その中身も前述の34話に）。

その後、私の書いた『わたしとあなたのけんぼうBOOK』と『たいわけんぼうBOOK+』の2冊が、第24回平和・協同ジャーナリスト基金 荒井なみ子賞を受賞し、ピース仲間と紅茶仲間が合流して「おめでとう・ありがとうの会」をひらいてくれた時には菊地くんはこのお祝い会の実行委員の一人になって、私に花束を渡す役を。それがまた、あ、ベテランズ講演会の時のあの若者だ、と彼を知る人がさらにふえる機会にもなりました。

菊地くんの開会宣言

3月21日は、19年目のピースウォーク金沢の日。ウォーク出発地点となる公園の集いでは、はじめてピースウォーク実行委員になった菊地くんが開会の言葉をのべました。菊地くんと出逢い、生徒憲章を知った仲間たちが、今年の開会の言葉はぜひ菊地くんに、と彼にお願いしたからです。

「みなさん、平和好きですか？（好きです、と会場からあがる声。）ぼくも好きです。家族で来てる人もいれば、ワンコもいます。いろんな人たちとの関係のなかに平和ってある。遠いところにあるものかと思ってたら、実は手の届くところにたくさん平和がありました」

そう言ってから彼は、母校の先輩たちが制定した、あの生徒憲章を朗々とそらんじてくれました。人権の章、自主の章、民主の章、希望の章に続けて、ピースウォークのこの日にあわせた彼のオリジナル、あらたな「平和の章」をつけたして。

【平和の章】

人間だから

わたしとあなたは行動をする

なにともしりかえのきかないのちと世界を
未来へ手渡す

わたしたちは人間だから

平和をねがい ともにあるく

開会宣言のあと、私たちと集まった市民とで思い思いに、歌ったり、太鼓のリズムで踊ったり、声をかけあったりしながら、楽しく車道を歩いてピースウォーク。菊地くんは金沢の目抜き通りをリズムにあわせて踊るように歩きながら、ダンスを披露。見事なバック転までして、ウォーク仲間や道行く人から、おお！と驚きの声と拍手をあびていました。

菊地くんを送る会

感じがよくて、誰にも好かれる菊地くん。2年間の石川でたくさんの友だちや仲間ができました。ここで働いてよ、うちに来てほしい、といった声も少なからずあった中で、彼はうんと悩んで、考えたろうけど、石川には残らないと決めました。それはきっと大学生時代に経験した痛みや悲しみ、障がいを持つ人たちとの出逢いを通しての、彼がこれから進んでいこうとする生き方からの選択でしょう。

彼がこの春から石川を離れると聞いて、それなら紅茶の時間で彼を送る会をしたいな、と思いました。送る会、といっても思い出を語りあう送別会ではなく、私が紅茶の時間で、個人的に断片的に聴いてきた彼のものがたり——北海道十勝生まれの彼が、帯広の高校から山形の大学へ、そして沖縄、石川の津幡を経て新しい場所へ旅立つまでと、これから——を、紅茶仲間やピース仲間と分かちあいたいと思ったんです。

4月はじめの送る会の日、菊地くんと出逢った人たちが紅茶に集い、彼の話に耳を傾けました。

山形では6年半、大学生活を過ごしたこと。その間、数年間引きこもっていたこと、そのころ心を病んでいたお姉さんを自死で亡くしたこと。障がいのある人たちに受け入れてもらったこと、大学の頃からずっと続けていたダンスで、彼らともつながってきたこと。沖縄で働いていた時、山形の友人から「ほめ言葉のシャワー」が送られてきて、津幡でその本をつくった私と知りあったこと。急に職を失ったけれど、そのかわり、10月からの半年間はとても濃い、紅茶やピース仲間たちとの出逢い期になったこと……。 (そう、このマガジンに書いているのはたった半年間の出来事なんです。なんて濃い日々だろう！)

生徒憲章、ふたたび

生徒憲章を見せてくれた土幌中央中学校のこともくわしく聞かせてくれました。彼自身が生徒会にはいったことで、憲章づくりを指導した顧問の先生から生徒憲章の中身を徹底的に叩き込まれたのだそうです。君たち、憲章の言葉だけ覚えててもだめだ、一語一語の意味がわからなければ、どうやってほかの生徒に伝えられる？ 互いを認めあう、ってどういうことだ、いじめに対してはどうすればいいんだ、と。

土幌中央中学は、生徒憲章にあるとおり、生徒たちが自主的に学校行事も決めていく学校です。遠足一つとっても、どこに行くか、行く人はどうしてそこにいきたいのか、目的は何か、などなど手問ひまかけて話しあう。先生の言うことがすべて正しいとはかぎらないことも学んだし、自分の意志を持つことの大切さも教わった、と彼は話してくれました。

卒業式もまた、生徒たちが話し合ってつくりあげるもの。菊地くんの卒業式は、生徒会の2年生たちが準備してくれた、日の丸も君が代もない卒業式。——だったはずが、式当日の朝になって、生徒たちの知らない間に校長が勝手に国旗をあげ、国歌を流すということが起こりました。何してるんだ！と怒りの声をあげる先生、泣いている生徒たちもいた。卒業証書授与のため、自分の名前をよばれて壇上にあがった彼は、「後輩たちがつくりあげてくれた卒業式をぶちこわしたあなたから、ぼくは卒業証書を受け取りたくありません」と校長に告げ、証書を受け取らなかったのだといいます。

十勝のちいさな町の中学でおきたそのできごとは“大事件”だったにちがいない、たちまち話題になり、新聞記事にもなりました。それが直接の原因かどうかはわからないものの、その後、彼の片耳は突然聞こえなくなり、それは今も続いているそうです。

生徒会顧問の先生からの卒業プレゼントは、「日本国憲法」と「あたらしい憲法のはなし」の2冊の本でした。先生から「君たちには権利があるんだぞ、でもそれを使うには責任と義務がともなう。生き方は、自分たちで決めていくことができるんだ」と教

えられ、反骨イズムも教わったと思う、と彼は話します。

そうして中学で学んだことを日常の中で発揮できる場面がなかったけど、紅茶に来だして、みんなと話しているうちに、あれが大切なものだったんだと気づいて、それによって僕が救われた。どこに引越してもずっとなくさずに持ち続けた生徒憲章のこと、ここでなら話してもいいんだ、って思えた。それに、紅茶でみんながよく話してる13条やBeのこと、それって中学の時に自分が学んでいたことだったんだ、とわかった、と。

そして、今後のことも聞かせてくれました。これから行こうとしている藤沢は、農にも暮らしにもまるごとかわる事業所で、身体や知的や精神に障がいのある人たちとともに生きていく生活をする。そこは、やがて山形で本格的に活動するための自分に必要な、修行の場でもあると考えていること。そしてその先には、山形でダンスというチャンネルを通して人とつながって、いろんな障がいある人とも一緒に生きていける世の中をつくりたい。それが彼の描きたい未来だ、ということ。

菊地くんはKickin' Dance Fam (KDF) *というグループの代表として、これまで以上にダンスで、いろんな違いを持つ人と豊かにつながっていこうとしています。

——一人で踊るだけなら、かっこいい！で終わるかもしれないけど、ある時、ダウン症の人と一緒にダンスパフォーマンスをした時、みんながものすごくよろこんで、涙を流して感動している人もいた。ダウン症のその人にとってもうれしそうで、ダンス



のあたらしい可能性を感じた。みんなで楽しい時間共有してたら、そこに争いはないと思うんで。

自分にとって、姉の死はやっぱりものすごく大きいことだった。今の自分はまだ、何もとげられていないけど、姉みたいな人たちに、こんな場所もあるんだよ、と言ってあげられる、そんな場所をつくってほしいなと思う——と話す彼。

今後はKDFの中で「Beするコミュニケーションワークショップ」という新しいプログラムも始めるそうです。一人ひとり、ほかの誰ともとりかえがきかない存在なんだ、そのことを彼はずっと前から知っていたのです。そこにあらたに13条の概念とBeのキーワードが加わったことで、いっそう、彼が13条する人に、Beの広報大使みたいな人になっていくこと、私はワクワクしながら確信しています。彼が働くことになっている山形のダンススタジオは、もうまもなくオープンするところです。

贈りものの言葉のシャワー

送る会で菊地くんが話してくれたこと、紅茶で何度か聴いたこともあったけど、はじめて知ったこともたくさんありました。点と点が線になり、線と線がつながって絵になっていくような、菊地くんのものがたり。

小一時間話をしてもらった後は、彼に向けてみんなからの「贈りものの言葉のシャワー」をしました。この日参加した一人ひとりが、菊地くんと出会って、彼の話を聞いて、彼のこんなとこいいな、すきだな、って思うところを折り紙に何枚でも書きだし、それを集めてシャッフルしてみなに配り直し、書かれた言葉を一つずつリレーのように読んでいく、というワークです。

私の思いついたそれは、とびきりのいい笑顔、自分のきもちを誠実に言葉にするところ、かっこいいダンス、真剣に考えるところ、一人ひとりを想う心、まっすぐなところ、まだまだたくさん。約20人の参加で、集められた折り紙は60枚以上もありました。一枚ずつ読みあげた後、折り紙を束ねて小箱に入れて、紅茶からの贈りものとして彼に。

最後に、菊地くんによる生徒憲章の朗読。返歌として、「ふるさと」のメロディに私が別の歌詞をつ

けた「平和のひとかけら」を全員で歌いました。

たからものをひらく

「こんなに度々紅茶に行くつもりなかったけど、行ったら心地よくてとても惹かれて。実を言うと、中学卒業以来18年間、誰にもあの生徒憲章を見せたことがなくて、話をしたこともなかったんで、あやうく干からびちゃうとこでした (笑)。おかげでやっと、これ、胸張って言っていいたいことなんだ、ってわかったんです」

送る会の翌週の紅茶に来て菊地くんがこんなことを言ってくれました。え、そうだったの？ 確かに「ここでなら」と言ってくれた言葉は覚えていたけど、18年間、誰にも見せたことがなかった、というのは初耳でした。

そのことを聞いて、そうか、そうだったんだね、菊地くんにとってこの生徒憲章は、生き方のバックボーンと言えるくらいの、本当にほんとうに大切なものだったんだね、ということが痛いぐらい伝わってくるようでした。本当に大切だからこそ、これまで人に話せなかった、話したくなかったのだね。もしも自分の大切なものを誰かに見せたときに、それが軽んじられたら、理解されなかったら、マジメなんだねと引かれたら、自分まで否定されたようなきもちになるかもしれない。それは、とても悲しいことだから。

ああ、紅茶の時間をしてきてよかった、紅茶がここにあってよかった。彼にとってだけでなく、紅茶にとっても。菊地くん、あなたが紅茶を信頼して、あなたの大事なたからものをひらいて見せてくれたこと自体がもう、私たちへの贈りものです。大切さとありがとうが行ったり来たりだね、と菊地くんにあらためてしみじみ感謝したことでした。

この話を娘にしたら、菊地くんのきもち、すごくわかるなあ、と。娘にとってのそれは、母親がしている紅茶の時間のこと。かなりの間、娘も紅茶のことを人に言えなかったのです。言ってもきっとわかってもらえないな、説明したところで、何それ？と言われちゃうだろうな。自分が大切にしているものをそんなふうに決してあつかわれたくなくて、紅茶の

話を誰にもしない時期が娘にも長くあったこと、はからずも菊地くんの生徒憲章のおかげで私も思い出させてもらえました。

生徒憲章のこと、紅茶の時間のこと、そんなふうに自分が大切に思っていることやものについて、当たり前前に話せる場がふえるって、その分その人にとっての、平らに呼吸できる空間がふえていくことなんじゃないかな、と思いました。

ひろがる生徒憲章

彼が18年間、誰にも見せることのなかった土幌中央中学校の生徒憲章。彼が十勝を離れ、どこへ越す時にも必ず携えてきた生徒憲章。それが今、彼の手のひらの中から、どんどん広がっています。

生徒憲章があんまりすてきだったので、私のFacebookに投稿したところ、以前からつながっていた十勝地方のママたちがまっさきにこの憲章に反応してFBで拡散しました。中には、この憲章ができる前の土幌中学の卒業生です、という人もいて。十勝生まれの生徒憲章の、いわば逆輸入。

北海道以外でも、この憲章を見た人たちがそれぞれにシェアしてくれて、20数年前の十勝土幌発のたねは全国各地へ飛んでいきました。とりわけ憲法のお話出前にいった先々で出会った人たちには、おおいにピンと来るものがあつたらしくて、次から次へのシェアがひろがっていきました。東京、長野、岡山、埼玉、愛知、沖縄などなど。昨秋、長野のけんぼうかふえ出前先で知りあった中国生まれの方は、この生徒憲章を中国語に訳して、ご自分のFBから発信してくれました。そして私はこれ以後、憲法のおはなしの出前によばれるたび、この生徒憲章の話を憲法13条とからめて語り、生徒憲章のコピーを参加した人たちへのお土産にするようになりました。

毎年4月、「スウさんのピースウォーク」と題してお話をしにいく東京調布のレストラン、クッキングハウス。今年のおはなし会でももちろん、菊地くんの母校の生徒憲章を紹介しました。その日は、クッキングハウスのメンバーたちと一緒にいつも歌づくりや歌の練習指導をしている、フォークグループ雑花塾の増田康紀さんも参加されていて、なんとおは

なし会の翌日には早速、この憲章に曲をつけてくださったそうです。

つい先日、クッキングハウスの総会に行った折、増田さんがはじめて歌って聞かせてくださいました。凛として、勇気がわいてくる、すてきな歌です。歌になった土幌町中央中学校生徒憲章。録音させてもらったこの歌は、いずれ、菊地くんを経て、北海道十勝の母校の人たちにも聴いてもらえることになるのでしょうか。

2019.5.29

* Kickin' Dance Famのこと

2010年に庄内のストリートダンスチームにダウン症の男性が加入したことをきっかけに徐々にメンバーが加入し、ダウン症者、発達障害者、健常者、子ども、大人など様々な人たちが共にダンスの活動を続けるダンスチームとして、2013から活動をスタート。

山形さくらんぼフェスティバルのダンスステージや、東京都江戸川区ボランティアフェスティバルでもダンスパフォーマンス、書家 金澤翔子氏とのステージコラボレーション、東日本大震災・仮設住宅でのダンスパフォーマンスなど…最近では、福島県伊達市で開催された「DANCE.DANCE.DANCE!!」に県外チームとして参加。オープニングパフォーマンスを務める。

* KDFの新しいプログラム、からだもこころも使った「ビーコミ」こと、「Beするコミュニケーションワーク」。送る会の後に早速開催し、そこに参加した人が、こんなこと書いてくれてめっちゃうれしかったんです、と菊地くんが見せてくれた感想の一部、ここにおすすわけしますね。

——ああ、なんと幸せな！と感じたのが、急かさない・急かされない空気感です。一般社会の日常生活で急かされることのなんと多いことでしょう。制限時間があることで人は優しくなくなってしまうのです。

でも、ここにはそれが無いのです。

たとえモジモジしても、たとえウーーンと迷っても、ニコニコ待っていてくれるのです。

——「待っている」とか「そのままでOK」と

か「いるだけで意味がある」とか。きっとそれは「愛」なんだと思います。

「スピード重視」とか「成長しよう」とか「誰かのお役に立ちたい」とか、そういう世界もあるけれど、たまに疲れちゃうこともあるから、人は「愛」のある場所に帰りたくなるのかもしれない。昨日はそんな場所をまた1つ見つけることができました。ありがとう。

